慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蝸牛考を讀みつつ
Sub Title	
Author	國分, 剛二(Kokubu, Goji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.167(523)- 172(528)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

將來續々方言學上の勞作を出版し、斯學に貢献せんことを望む。然し評者をして忌憚なく云はしむれは現在の日本の方言學にとり必要なるは發表機關よりも寧ろ撓まず倦まず此研究を育て勵ましゆく中央機關の樹立である。由來日本人は熱し易く覺めやすい。方言採集の事業も一時盛んにして中途に挫折せんことを恐れる。政府の僅かな補助金により、ソルボンヌ高等研究院の片隅で倦む所なくこつ〳〵勵精し遂に不朽の「フランス言語地圖」を完成し言語學界に一時機を劃したジリエロンの如く、日本にも椽の下の力持ちになる覺悟で持久的にこの運動を支持すべき中心者の出現が望ましい。自分は、この「叢刊」の發起者たる三氏が進んで此任に當るべき人士であることを信じて疑はない。(松本信廣)

——蝸牛考を讀みつつ——

柳田國男先生の『蝸牛考』を讀んで居る中に、私共の使つて居る方言を思ひ出したので、それを少し認めてみた。(郷里は山形縣鶴岡市の商家、舊の莊内酒井侯城下)

蝸牛考　頁　方言

土龍　三　モグラモヅ

日照(ひて)らえなェがらモグラモヅみだえだ　奴(やづ)　だ。室(うぢ)にバッカリ居(い)で。「(ヅ・づぢは半濁音?)以下半濁音?は『半』の印のみを付す

蜘蛛　三　クボ

虫のクボのみでなく、三百代言の一名をクボといふ。尤も虫のクボと三百代言のクボとは、アクセントが異つて居るかも知れぬ。

蟻　三　アリ

丁斑魚　四　メグラザッコ

御飯(オマヽ)ソガエこぼして食(く)うド　メグラザッコになンぞ。(グ・ド半)

蟷螂　四　エボボヅ

エボボヅかま首立(グびた)デヾ來ダ。(ヅ・グ・デ・ダ半)

エボボヅ腹立(はらた)つた〳〵。

蝸牛の唄　二四

カサツブリ〳〵角(つの)だせ槍(やり)だせ、槍だせ角だせ。

カサヅブリかも知れぬ。(ヅ半)

カサツブリは　笠(かさ)ツブレ　の訛かと思つて居つた。

蝸牛の黑燒は婦人の病によいといふて食ふ人もある。

伯母　三六

ガバの音は自分の伯母樣をいふ時と、自分の妹をいふ時とのアクセントは異つて居るやうだ。また娼妓の一名になつて居るから此時は、前二者とも又アクセントが異つて居るやうにも思はれる。

オバチャのチャは尊稱で、樣の事であるから、伯母サンにも相手の妹サンにも使ふ。但し鶴岡ではサンといふ事よりハンといふ事が多く使ひ、酒田港ではサンを使ふ。(伯父樣はガンチャといふてオヂサンといふ事はないやうだつた)。

尙ほ第三者の妹、及び目下の妹をガバコともいふ、コは輕い尊

稱である。姉（あねゝ）コ・小弟（ヲヂ）コ等ともいふ。

作右衛門殿（サクエンド）
作右衛門（サクエン）
作左衛門殿（サクザえムド）
作左衛門（サクザえム）
―名の呼方の例に掲げたので別に意味はない。

オバチャだし
オバコだし
だのし

右のやうに「サクエンドのオバチャだし」又は「サクエンのオバコだのし」等といつては伯母であるか妹であるか判斷がつかぬ事がある。

オバーコ來（く）ーるかやーアと　田甫（たムぼ）の端（はンヅ）れまーで　出（で）ーて見ーダばー

オバーコ來（き）イもせーで　用（ヨ）のなアーい螢（ほヲダる）の虫（むツしコ）なーごー飛（とム）で來（く）ーるー

コバエチャ〳〵

オバーコ心持（こゝろもヲ）ヂー　池（いけ）の端（はダ）の蓮（はつす）の葉（は）ーの溜水（たまァりミーヅ）ー

少（ツーコ）し觸（さァわる）デードー　ころ〳〵ヲ轉（ころム）でーそンま落（お）ヅーるー

（少しのツコシは實際はスコシといふのであらうがスとシの間の音の爲にや、ツコシとも聞えるやうだ。タ行の濁音で片假名は半濁音に聞えるのは勿論だ）

此のオバコ節のオバコは、娘の事で伯母の事ではない。姉でも妹でも嫁にならぬ娘の子をいふのである。尤もアネコといふ事もあるが、此のアネコのコは前にも述べた通り輕い尊稱になつて居るから、アネコといへば、姉にも妹にも使ひ、或時は嫁入つても若い女であれば使はれる事もあるのである。尤もアネコもオバコもアネッコ又はオバッコとなる事もある。尚アネチャといへば少し丁寧で、アネハンといへば最も丁寧な尊稱になつて居るので、中流上流階級以上の若夫人の尊稱にもなつて居るやうだ。

蛞蝓　五一　ナメクジラ

水澄まし　六五　シオガラ。ショーガラ（ガ半）

ショーガラ食うド、泳ぎが上手になる。

搔餅　六九　カダモヅ（ダ・ヅ半）

巫女　七〇　ミゴ　尊稱する時は　ミゴド（ゴ半）

鶴岡の巫女に二種ある、甲は神社の神樂堂で舞ふ鈴取巫、（すゞとりみこ）眼明で普通人と異はない。乙は市子の類で、神祭（かみあそび）や占をするので盲（めグら）である。占を賴みに來る時に、メメコブクロ（米袋カ）といふ袋に米とお錢を入れて持つて來る。袋は色々の織物の切を集めて作る。此袋は神社佛閣を參詣する時にも使ふ。（め「グら」のグ半）

ツグラ　八六　エヅメ。イヅメ。エンチコ。

赤坊（アガチャ、アガ）を入れる。（ガ半）

御飯入は　お鉢（オハヅ）エヅメ。飯（メシ）エヅメ（ヅ・ガ半）

私共は之で成長つた。普通は藁で作るが、上等の分は稈心（みご）（藁の皮を去りたる莖）のみで作る。赤坊生後半年位までを入れる時は、三分の一位（コモ藁の柔な分）一名藁「（わら）ゴモ」（ゴ半）を入れ、其上に灰（アグ）または藁灰（わらアグ）（グ半）を用ふるのが本式だ、藁灰は柔いから油紙等にて包み厚さ一

寸位入れ、其上に品物の名稱方言をエグサと稱する、エグサ藺の莖にて似て細く短く柔き草の一端を結びて〓の形にしたるものを布き、其上に赤坊のお尻(ケツツ)を直ぐ着け、大便も小便も此エグサと藁灰に浸ませるのである。藁灰は濡(ヤベヅグ)(ヅ・グ半)ならなければ取替へないけれども、エグサの方はお尻を替へるごとに取替へ、藁灰は捨てゝ肥料に用ひ、エグサは水で洗つて干して置き破(ボコ)れるまで用ひ、普通三ツ四ツを準備して交代に用ふ。偖て赤坊を轉ばぬやう寒くないやうにとて、寢衣(ねまき)や小さき布團などで竹子の皮のやうによく包み、乳を飲ませる時も其儘にして飲ませる。赤坊はすや〳〵とよく眠つて居る、寒むくない事は保險つけられる。尤も大きくなると眼覺めて居る時は、手のみ出して置き玩具を弄(チヨ)させる。ので手が足りない家では朝から寢るまで其儘にして置く事もある。從て此癖がついて居る爲に、歩(ありグ)(グ半)やうになつても入つて居る事があり、尙ほ夏などは藁を取り捨てゝ深くして置くと、此中に入つたり出たりして遊んで居る兒もあるやうだ。此エヅメに入つて居る赤坊をエヅメゴといふのである。此の飯詰兒の人形がある、甲は瓦人形で、乙は柏の實(團栗)ドングリ)方言はカシのミといふが學名はミヅナラ?の殼斗(椀狀のもの)を利用して作るのである。私共は之を「カシのワンコ」といつて居るが實名は如何にや、此の「カシのワンコ」に紙または織物の切(ツギキレ)で作つた小さい人形を入れて、エヅメゴそのまゝに作るのである。今は此の人形は絹の切で作られて賣物にも出來て居る。

人形のエヅメゴは兎も角も實用のエヅメ御入用の仁がおありだつたら、鄕里の自宅に注文すれば幾らでもお世話が出來ます。呵々。

渦卷　八八　マギ　(ギ半)

單にマギといへば粽と間違れ易い。渦卷のマギと粽のマギとはアクセントが異つて居るであらうが。粽のマギは笹の葉に包(クル)むから一名「笹(さゝ)マギ」ともいひ、漢字は笹卷と書くかも知れぬ。で笹の葉で包む事を「笹の葉でマグ(グ半)ともいつて居る。此の笹卷には二種の製法がある。甲は餅米を灰(キアグ)(普通の灰の事)水(みづ)に浸(つけ)て、此の餅米を笹の葉に包むのである。尙ほ包方にも二通りがある、Aは三角形に包む、之が普通であるが、Bはお祝—七才・古稀壽等お目出度い時には、竹子の形に笹の葉をぐる〳〵と卷くのである。眞實に笹の葉を卷くから「サ、マギ」といつたのではないかとも思つて居るが如何にや。乙は特に「團子マギ」といつて米の粉(こな)を團子にして笹の葉で包むのである。此の「團子マギ」の中には餡(あん)などを入れる家もあれば、草餅を入れる家もある。何れも包むのが終れば釜に入れて煮(ゆで)るのである。而してよく煮れば笹葉を剝(む)いて、黑砂糖の水に解した汁、即ち黑砂糖水に浸(いれ)てそれから黃粉(きなゴ)(ゴ半)なり白砂糖なりで食べるのである。黑砂糖に入れるのは、黃粉がよくつくからである。尙ほ黑砂糖水に浸れないで白砂糖のみか砂糖醬油のみで食べる人も少くない。

附　東京で薪をマキ(ギ?)といふが、私共は割木(ワリキ)とい

つた。割木にも普通の割木と大割（おおワリ）と八尺（ハツシヤクと又は八尺木（ハツシャクギ）の三種があつた。ガオワリは錢湯などで用ひるので普通の家ではメツタに用ひる事がなかつたが、八尺は樸（ブナ）の木で赤川（最上川の支流）の上流、大鳥村から秋になると流して來る薪であつた。長さ五六尺位、徑は大きければ壹尺五六寸細くても五六寸位の材木で、川から各の家で買ひ取ると、木挽が來て適當の大さに挽き、之を各が少さく割つて用ひるのであつた。此の八尺は全くのアテ字で、或人は、昔し殿樣から一時借りて用ひるものであるから「拜借木」と書くかよいといひ、或人は、完來、八尺づゝ切るのであつたが、山役人の役德が公然と行れたので、六尺に縮め本數を多く切り出し餘分の數を自分の所有にしたのが原因で、現在は此の習慣になつたのであると、さも眞實の如く說く人もあつたが、私は何れに軍配を擧げたらよいか迷つて居る一人である。

フトコロ　八八　フドゴロ。ホドゴロ。（ド・ゴ半）

坐　八九　正座はネマル、スワル。傾座はヨゴナグレ（ゴ半）胡座はアグラ、アグラカグ（カグのグ半）

藁製容器　八九　手で持つか、肩に胴亂のやうに掛るものは手籠（テンゴ）。背に負（しよ）うものは荷俵（ニダワラ）（ダ半）尙ほ蔓で編んだものは蔓手籠（ツルテンゴ）。

籾殼　九〇　モミガラ　米の外皮

糠　九〇　ノガ、米（こめ）ノガ（今は「ヌガ」か）（ガ半）

藁屑　九一　ゴミ

櫟ぐる　九二　コチョパタえ。コチョパス。

錘　九三　田螺　九五　ツブ

錘はツブ又はツムといふ事もあるやうだが、田螺はツブ又はツバ。單に「ツブ」といへば剝（む）き田螺の事、殼田螺はカラツブ（殼に入つて居る其まゝの田螺）（主に醬油にて煮る。ツブの味噌合（みそヨゴシ）もある。）春になると明方より女の聲（主に娘）で

ツバ〳〵

と振れて來るのを聞くと、いかにも春らしい氣分がして氣持がよかつた。今は如何にや。海の螺はツブ貝（カえ）。ツブカえ汁（味噌汁が多い）田螺を食ふ時は、先づ殼田螺を二ツ三ツ買ひ、之を神に獻るといふて川に流す。其故は眼を病ぬやうに眼の神に獻るのであつた。

髮の型に、も「ツブカラ髷」（まげ）といふ束髷の一種がある、主に三四十才以上の婦人の略髷のやうに記憶して居る。小さい家をツブカラのやうだ家（エ）又はツブカラヤともいふ。是は餘談ですが、今年のお正月、久能山に遊んで其の歸途――靜岡に近い村の駄菓子屋で田螺を串に五ツ六ツ位づゝ刺して醬油煮て賣つて居つた、五厘で五ツの團子を思ひ出して懷しかつた。また鄕里なら吹雪で埋められて居るのに、駿河國では田螺を獲る事が出來ると思つて、つく〳〵此土地を慕（ケナリ）がつた。

松毬　九三　マツフグリ（ツ半）。フグリタマ

稻村　九三　ニオ。イナニオ。イナニョ。肥料塚をコエツガ（ツガ半）。コエニオ

蜻蛉　一〇四　トンボ。トンボハン（ハンは尊稱）ヤンーマ。ウルシヤンマ。ヤンマドンボ。ナベドンボ（黑くて水上に

居る。)ミソドンボ。イナガリドンボ。アガドンボの三種の名は同じ蜻蛉の異名で赤く小さくして、秋も遅く稻刈の頃に飛ぶ。(ド・ガ半)

植物「つゆくさ」をトンボグサ(グ半)ともいふやうだ。

鱗　一〇五　コゲ。コゲラ　(ゲ半)

苔のコゲと魚のコゲとはアクセントが異つて居るかも知れぬ。

頭の垢　一〇五　フケ

魚　一〇五　大魚はオオイオ。鮭はサケ又はイオ又はサケのイオ。肴を幼年の者はトド。オドド。(オは敬語、ド半)

肉　一〇五

「シシ食つた報ひ」といふ話がある、之は鮭(イオ)の鮓(スシ)であるかも知れぬが、私は猪の肉(シシ)を食つた報ひと解したい。顔面におでき(デギモノ)が出たのをいふから。

臍　一〇五　ヘソ

算　一〇五　算盤ヨムともいふやうだ。

糞たる　一〇六　クソした。クソヒッタ。ネッコバル。ネコバッタ。ネッコバッタ。

嚔　一〇六　シャックリ

驚(オボケ)だばシャックリ止(とま)つた。(ゲダ半)

燕　一〇六　ツバグラ(グ半)　ツバメ、

バンドリ　一〇六

荷物を負(しよ)う時に用ひる(バンドリ)と、鳥の番鳥(バンドリ)とのアクセントは異つて居るやうだ。

前者は藁で作つたものをワラバンドリといひ、織物(木綿で)作つたものもあるが名稱失念し(織物(ツギ)バンドリ?)藁製は龜の甲の如く作り、織物製は、陣羽織—袖無(ハッピ)(子供のオチャンチャン)の如く作る。藁製にはなか〳〵手を込めて巧みなものがある、農村藝術として一種の工藝美術品であると思ひます。此のバンドリは鄉里の自宅にも有る筈ですが今は如何にや。尙ほ織物のバンドリは荷俵など輕い物を負う時に用ひるので、重い物を負う時は用ひない、市街に綺麗で輕い物を負つて來る時には用ひられるやうだ。所謂ヨソユキのバントリである。尤も藁製のバンドリでも美術的の物は勿論ヨソユキの物である。

地　一〇八　ヅヅベダ　(ヅ・ダ半)

濕地　一〇八　ヤヅ　(ヅ半)

ミザ　一〇八

水をミザといふ事もある。冷(ハッコ)い水(ミザ)。水泳(ミザアブツ)て來(と)へ。

可愛い　一〇八　メゴエ。メンゴエ。メッコエ　(ゴ半)

メゴ又はメコといつてよく初孫(男女共)などに用ひる事がある。外孫はソドメゴ(ド・ゴ半)といつて居るやうだ。で幼い子供をメゴ〳〵と呼ぶ事があるから、幼い子供は自分の名をメコ又はメゴと思つて、自分をメコ、メゴ、メー、メコチャ、メゴチャ、メコハン、メゴハンなどゝ自稱する事がある。

メッコと促れば片目の事になる。兩眼失明はメグラ。(グ半)

按摩(あんま)及び針醫師(はりし)をボサマともいふ。童謠に曰く

ボサマ小便壺（しよべつぼ）で顔（ツラ）洗らた、其手でお釋迦様（さん）に團子上げだ、お釋迦嗅（くさえ）ごて鼻まげた。

ミジョケナイ　一〇九

メジョケえネえ、ミゾケナえ　は憐れだといふ意味のやうだ。乞食の子が雨に濡れてショボ〳〵來るのを見て、メジョケネえといふやうだ。

唾　一一一　ツバギ。ツバゲ　（ギ・ゲ半）

唾　二二　アグド　（グド半）

虎杖　一一二　ドンゴエの事かと思ふ。

「火葬場（ヤキバ）のドンゴエ」といふ譬がある。火葬場のドンゴエは早く大きく成長るので、柔になつて居るから、觸れると直ぐ折れ易い故に、人間も身體のみ高く大きくて、何の役にも立たぬ子供をいふやうだ。

出双庖丁　一一四　ナマグサボーヂョー。ナマグサボーヂョ。

私が「ホーヂョ」といつたら何んの事か解らなかつた、それで「ホーチョー」と濁らずにいつたら直ぐ解つた。

直綿　一一四　マヲダ　（ダ半）

白水　一一六　シロミヅ

余り長くなつたから此位で擱筆。（昭和五・八・十七、國分剛二）

京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄（考古學教室編　昭和五年三月發行）

京都大學の考古學教室がその陳列品の豐富をもつて知られてをることは云ふまでもない。大正十一年同陳列品の圖錄を公けにして以來昭和三年に再版が出版され、更に本年に至りその增補三版が公けにせられた。その蒐集品の多くは既に研究報告書により繪葉書により學界に紹介せられてをるけれども本圖錄中にはそれ以外のものまた尠少ならぬ。その上兎に角全てが一つに纏められてあるのは、重寶此上もない。今後同陳列館を訪れるものの是非前に一覽すべきものであり、また既に一見した者も之によつてその記憶をよみがへらし得るであらう。圖版全て百二十日本朝鮮支那歐洲埃及希臘西亞諸國印度アメリカにわたり、微を盡し、細を穿つてをる。これで郵稅共五圓の定價は、けして高價でない。たゞ難をいへば、所々少しく誤植脫落あること、たとへば第六五圖に數字番號なきことなどである。國史東洋史西洋史研究者が座右に備へをくべき良書の一つとして本書を推薦したい。（希望者は京大考古學教室宛に申し込むべし）（松本信廣）

朝鮮古蹟圖譜第十册（朝鮮總督府發行）

朝鮮に於ける木造古建築は、數乏しくかつては日本建築の母胎となりしその優秀なる技術も僅かに高麗期の二三及び朝鮮後期のものによつてその餘韻を窺ふのみである。本圖譜は、宮殿建築の代表とも云ふべき景福宮、昌德宮、昌慶宮の寫眞及びプランを收めてをる。雄大壯麗なる景福宮勤政殿、石柱美しき慶會樓・風致愛すべき昌德宮秘苑内の諸小亭等吾人を魅する諸建築は鮮明なる圖版によつて餘蘊なく紹介されて居る。添へられた景福宮進饌圖